

P.

話題の本棚

ディケンズ著『荒涼館』

竹田青嗣著『欲望論』

特集／大学的読書事始め2018

新刊コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



UNIV. 京大生協

綴葉編集委員会

英國ミステリーの潮流

荒涼館（全四巻）

佐々木徹訳 ディケンズ著 岩波文庫



ミステリーとしての「荒涼館」

遺産権益を巡る人間模様を描いたこの物語。「荒涼館」とは、訴訟の利害関係者三名と、主人公・エスターが暮らす屋敷の名称を指す。原題はBleak House、「吹ききらしの家」と言つたところか。その名が示す通り、訴訟が引き起さず貧困、病、死といった不条理の嵐は、荒涼館を取り巻く一見互いに無関係な人々へと容赦なく吹き付ける。そして、各々の物語が、エスターの出生秘話へと収斂する様が作品の本筋であり、この意味で本書はミステリーに属する。

ここで、廣野由美子著『ミステリーの人間学—英國古典探偵小説を読む』（岩波書店）を紹介しよう。ミステリーについては一般に、それが「ゲーム」か「文学」かを巡って論争がある。大さっぱりに言って廣野は、ポーに始まる米国ミステリーがゲーム性を、ドイル、クリスティ等へと連なる英國ミステリーが文学性を体現すると分析し、後者の源流としてディケンズを位置づける。そして、その代表作が一八五三年出版の本書『荒涼館』に他ならない。

では、ディケンズは単なる謎解きゲームに留まらない『荒涼館』という「文学」によって、一体何を伝えようとしたのだろうか？

まず一つにして、当時の英國における法制度の腐敗という社会矛盾が挙げられよう。今日でも「社会派ミステリー」というジャンルが存在するように、犯罪とその真相解明を本筋とする文学形式は、社会矛盾を浮き彫りにするテーマとの親和性が高い。例えば、その典型例とも言える宮部みゆきの『火車』は、謎の失踪事件の解明を通じて、カード破産の実体を描く。そして『荒涼館』は、法律家の懷だけを肥やし、その審議過程で関係者の人生を破滅させてしまう大法訴訟への怒りを表現しているのだ。本書の読者は、社会の不条理といふ「暗闇」が人々を覆っていく様を目撃するに至るだろう。

ディケンズが描いた「光」

しかし、人間はこの「暗闇」にただ飲み込まれるだけの存在ではない。読者は同時に、本作品における多くの人物が、どうしようもなく大きな「暗闇」の中であつて、蠟燭の火のような小さな「光」を灯していくのを目に見えて、少々ネタバレになるが、例えばエスターは病によって容姿が変貌し、ささやかな恋心さえ奪われてしまう。しかし、彼女はこの「暗闇」に絶望するのではなく、周囲の変わらない愛情に「光」を見出す。そして、自らも素朴な愛情で応えていることで、物語にまた一つ「光」を加えるのだ。かくして、「暗闇」に覆われたはずの本作品は、ほのかな明るさに包まれていく。ところで、ミステリーにはミスリードと逆転が付き物だと思う。読者は、最後に「荒涼館」が「暗闇」から「光」の象徴へと変わる様を目撃するだろう。その「光」は、エスターが唯一諦めていたものへと差し込む。決して「暗闇」が消し去れないものに。（い）

話題の本棚

相対主義を成仏させる試み

欲望論 一・二巻

竹田青嗣著
講談社



標的は「ゴルギアステーゼ」

本書は哲学が古代から延々と抱えてきた一つのドグマを終わらせるための一冊である。今、現代社会においてこのドグマは哲学の進歩だけでなく、「ミニミニケーション」の意味さえも失わせようとしている。そのドグマとは「ゴルギアステーゼ」である。

(1) わよそ何も存在しない。あるいは存在は証明されない。

(2) 万一本在があるとしても、決して認識されない。

(3) 万一本在が認識されたとしても、決して言語化されえない。

「正しいものなど存在しない」「ありのままの出来事など認識できない」「本当のことは言葉にできない」……古代より続くゴルギアステーゼは、今も手を変え品を変え、私たちのミニミニケーションを支配している。この支配の中では人間の認識は信用できず、言葉はその価値を持たない。

著者は言葉の信頼が失われたとき、暴力原理がその姿を現すと警告している。「何が正しいか」「何が善く、何が美しいのか」という問い合わせそのものが虚構に陥った時、「強いものだけが正しい」というパワーゲームによって他者を屈服させる世界が現れるのだ。哲学は暴力原理を抑えるために生成されてきたと著者は述べる。言い換えれば恥も外聞もない「パワーゲーム」ではなく、双方の共通了解を生み出すための「言語ゲーム」の世界を作るために生まれてきた。

古今東西の哲学を網羅しながら「ゴルギアステー」ゼを成仏させるための本書には、二一世紀を生きる私たちに向けて、言葉の信頼を取り戻す土台を提供してくれる。

すべては欲望に関わっている

「真理はここにある」という本体論と「真理など存在しない」という相対論は一見対を成しているように見えるが、真理を指定している点では同じである。この指定を終わらせたのはニーチェであった。ニーチェは誰も認識しなくてもありえる存在「物自体」を否定し、すべての存在は認識の相関性でしかないことを述べた。ニーチェを真理の否定である相対主義の枠組みではなく、疑いのない認識の相関性の枠組みで捉える本書は、ここに「ゴルギアステーゼ」を乗り越える転換点を見出した。著者はこの相関性の議論に「欲望」という概念を付け加える。私たちは欲望によって対象を認識し価値付けを行う。ニーチェ・フッサールを経由しながらあらゆる存在を「欲望相関性」で捉え、この概念から真・善・美を刷新するのが本書の主軸だ。膨大な本書の解説は著者の弟子である吉野一徳氏が自身のブログで詳細に論じているので、そちらもご覧いただきたい。

著者は「欲望相関性」のアイデアを抱いてから四〇年という歳月を経て本書へと辿り着いた。言葉の信頼が失われる社会の中で、本書がその信頼を取り戻す端緒となることを願いたい。（きもの）

(一巻 七三四頁 四三三〇円 10月刊)
(二巻 五八六頁 四一〇円 10月刊)

〈特集〉

大学的 読書 事始め2018

大学生ってどんな本を読むんだろうかとお悩みの新入生も多いことと思います。そこで今号は毎年の恒例で綴葉編集委員が新入生の方のためにこれから道標となるような本を選書してみました。少しでも興味のある本があればそれからスタートしてみてください。あなたはどの本を選びますか。その本があなたにとっての人生を変えるものになりますように。

(ういろう)



饗宴

プラトン著

久保勉訳 岩波文庫

方法序説

谷川多佳子訳 岩波文庫

デカルト著

「我思う、ゆえに我あり」。有名な言葉ではあるが、そこに至る過程が如何にして形作られたかを丹念に追う者はあまり多くはない。近代の哲学における問題の根本にある「我」の概念はこの書から始まつたと言つていいだろ。古典の思想として敬遠する向きもあるかも知れないが、今日に連なる思想の原点として何處どなく立ち戻るべき一冊ではなかろうか。

(一三七頁 税込五二二円)

(春海／ねこ)

ボーデレール 他五篇
ヴァルターベンヤミン著
野村修編訳 岩波文庫

一つの美しい肉体に惹かれる事から始まる。いくつもの肉体美や精神の美、職業や学問の美を経て、永遠不変の美のイデアを観るに至る。この道程がすなわち哲学の目標、愛の奥義、人生の唯一の生甲斐をなすと知の巨人は記す。決定的な啓示を受けたような、煙に巻かれたような、ふしきな酔いの感覚がある。この酔いの波の寄せ返しのうちに、以後の西洋哲学はある。(一九三頁 税込七二三円)

フリードリッヒ・ニーチェ。常に時代に抗いながら思想を紡ぎ続けた戦闘的知識人である。本書は、彼が同時代の学問、芸術、歴史、そしてそれらを包括する文化全体を健全なものとして彈劾する四つの論考から構成されている。健全な精神活動とはいかにして可能か——この問いをめぐって格闘するニーチェの切迫した思考に、是非じっくりと向き合ってほしい。(六〇五頁 税込一九四四円)

ニーチエ全集(4)反時代的考察

フリードリッヒ・ニーチエ著

小倉志祥訳 ちくま学芸文庫

(二二〇)

トニオ・クレーゲル ヴェニスに死す

トーマス・マン著

高橋義孝訳 新潮文庫

自らは文学や芸術の世界に浸って高踏的にゐるまい、同級生らが戯れているのを内心嘲りつつ遠巻きに眺めながらも、実はそこに交じりたいと思う……そんな経験はないだろうか。理性に従い気高く生きることと感性に身を任せ楽しんで生きることとの間の葛藤を描いた表題二作品を、右で書いたような鬱屈した青年期を過ごした「非リア」のあなたへ特に捧げたい。

(二五九頁 税込五二九円)

ユリシーズ(全4巻)

ジェイムズ・ジョイス著
丸谷才一、高松雄一、永川玲一訳 集英社文庫

ダブリンの街のある一日を描くのにこれだけの分量がいるのか?『オデュッセイア』へのオマージュでもあるこの作品は、作者ジョイスの持つありとあらゆる知識を詰め込んで驚くべき内容となっている。練られた構想、多彩な文体、留まるところを知らない意識の流れをなぞった文章。読む側の読解力が試されることが講げ合いだが受け立ってみたまえ。

(六八七頁 税込一二四二円)

(口／ね)

ドン・キホーテ(全6冊)

セルバンテス著

牛島信明訳 岩波文庫

悲劇と喜劇の違いとは何だろうか。人間は愚直な人の滑稽さを笑いながら、率直な人の絶望に涙する。聖書の次に読まれたという文學の永遠の名作ドン・キホーテはこうした悲喜劇の代表作だ。一七世紀前半に書かれ、今も愛され続ける本書には、何世紀を跨いでも変わらない人間の喜びと悲しみが散りばめられている。

(四三二頁 税込各九七二円)

星を継ぐもの

ジェイムズ・P・ホーガン著
池央耿訳 創元SF文庫

月面より発見された遺体、それは地球人のものではなかった!その衝撃的発見を端緒として、はるか異星世界への探求が始まる。ホーガンの描き出す読者を選ぶことのない時空を超えた謎解きの面白さは、まさにファンタジーSFの金字塔と呼ぶにふさわしいだ。これから、壮大なSFの世界を傍らにした新生活をはじめてしまうのはいかがだろか。(三〇九頁 税込五六六円)

(きもの／トロ)

青鞆小説集

青踏社編著
講談社文芸文庫

女性の覚醒をうたった『青鞆』は、今や専ら平塚らいてうによる創刊の辞『元始女性は太陽であった』や後期の諸論争によって知られているが、本来は女流文芸誌だった。本書は初期の掲載作品から編まれた小説集である。習俗に翻弄されながらも闘う一八人の「新しい女」たちの多様で瑞々しい自己表現は、現代の若い女性にも感銘を与えるにはおかないのでだろう。(二七二頁 税込一六二〇円)

サフダ記念日

俵万智著
河出文庫

「朝刊のようにななたは現れてはじまりという言葉かがやく」「思い出のひとつのようにそのままにしておく麦わら帽子のへこみ」「上り下りのエスカレーターすれ違う一瞬君に会えてよかったです」「我という三百六十五夜がぶんぶん分裂して飛んでゆけ」——青春は短い、三十一文字のように。だからそのまつさうの日々よ、毎日が何かの記念日となれ。(二〇八頁 税込五一八円)

(靈人／春海)

忘却の河

福永武彦著
新潮文庫

「しかしわたしはまだ生きていて、あなたのことを見い出している」。誰もが心に闇を抱えている。忘れないこと、忘れてはならぬこと、忘れてしまつたこと。作家は、愛の危機に瀕したある夫婦と二人の娘、さらに別の男の内面の迷路と共にさまよい、その模様を名作に定着させた。読み終わって、深淵の面に光を見た。だからわたしは生きていくのだ、という光を。(三五三頁 税込五九四円)

王国(1—4)

よしもとばなな著
新潮文庫

よしもとばななの長編『王国』は、今僕らに必要な価値観を与えてくれる。それは文学という柔らかい言葉でしか表現できないような、輪郭が曖昧で切り取つたら消えてしまいそうな寂しさと優しさだ。サボテンを愛する雲石と目の見えない占い師の楓による物語は、霧の中で孤独に迷う人に、太陽のある方角を教えてくれる。(一五三頁 税込四〇〇円)

(春海／きもの)

銃・病原菌・鉄 1万3000年にわたる人類史の謎上下巻

ジャレド・ダイアモンド著
倉骨彰訳 草思社文庫

インカの民族は何故スペイン人に滅ぼされたという結果になったのか? という疑問から始まり、地球上の各地域の発展における差異について、環境要因という観点に立つて壮大な人類史を描いてみせたのが本書である。ヨーロッパ中心史観に立っているという批判的読解も可能なだが、批判するためにも一度は読んでおく必要があるだろう。

(四二六頁 税込九七二円)

読書と社会科学

内田義彦著
岩波新書

読書と言つてもその方法は様々であるが、本書で展開されるのは「古典としての読み」である。その読みの特徴は、「一読では理解できないほど困難であるゆえに読み手によって三者二様の見解が出てくる」というものだしかし、そうした見解の相違こそ大学時代の宝とすべきだ。それがあなたの個性なのだから。本書はそれへの手がかりとなってくれるだろう。(一八八頁 税込七九九円)

(ねこ／うじろう)

科学哲学への招待

野家啓一著
ちくま学芸文庫

科学とは何かとは何か。科学とは何かといふ問いは哲学的考察による科学哲学によって答えられるように思える。しかし、その問いをもっと厳密にすると、幾度となく起つた科学革命の歴史を、そして科学によって起こった原発事故などについてはその社会学を知らねばならない。本書は科学とは何かをそれら多角的な視点によって更に問おうとする一冊である。(三〇二頁 税込二一八八円)

差異の政治学

上野千鶴子著
岩波現代文庫

フェミニズムを牽引してきた上野千鶴子の論文集である本書は、フェミニズムの多様で豊かな蓄積と歴史的・現在的意義を示して余りある。通読すれば、「ますます錯綜し多様化する状況のなかで、フェミニズムだけで解ける問題はなくなるだろうが、逆にどんな問題もフェミニズムなしには解けなくなるだろう」という上野の言葉に深く同意することになるだろう。(五一八頁 税込一七二八円)

(ういろう／靈人)

時間の比較社会学

真木悠介著
岩波現代文庫

本書は近代における時間意識への道程と、そこからの脱却を目指している。つまり、本書での課題は「ヒリズム」ということにならぬ。ヒリズムは第一に虚無化していく不可逆性としての時間、第二に抽象的に無限化された等質的な時間であり、それらが結実したのが近代の時間意識である。近代と時間によつて何が失われ、どうしたらいいのかを知る一冊。

(三三二頁 税込一四〇円)

資本論に学ぶ

宇野弘蔵著
ちくま学芸文庫

本特集の趣旨に照らせば本来は『資本論』

自体を挙げるべきだが、やはり難解なため読みこなすには入門書を要するだろう。本書はマルクス経済学の泰斗が率直かつわかりやすく持論を開陳したもの。理論と実践を截然と分け、科学として確立された宇野経済学は逆説的にも新左翼運動に多大な影響を与えてきた。本書からはその妙味もまた感じられる。(二六八頁 税込一八八円)

(うじこう／靈人)

西洋美術史入門

池上英洋著
ちくまプリマーニ新書

大学生生活の中では勉強以外のことをしてくる時もあるだろう。そんな時に絵でも眺めるのはどうだろう。さて、絵にも読み方がある、と言つたら驚くだろうか。絵画に描き込まれたモノには意味があり、その意味を知るのがイコフォグラフィーというものである。まあ堅苦しい話はやめにして本書を紐解けば、实物を見ながら知識も身につくはずだ。

(一九〇頁 税込一〇一六円)

外国語学習の科学 第一言語習得論とは何か

白井恭弘著 岩波新書

この4月から新たに外国語を学び始める、あるいは今後英語の能力を伸ばしたいという読者も多いだろう。何事でも、成果を収めるためには具体的な努力に加えてよい戦略が必要である。外国语学習に関する科学的な知見を解説した本書は、いわゆる語学の習得がどのように進むのかを理解し、よりよい学習計画を考える上で非常に役に立つはずだ。

(一一四頁 税込八二一円)

(ねこ／蕨餅)

トル「のもつ一つの顔

小島剛一著
中公新書

ケマル・アタテュルクの夢が生んだ中東の国民国家・トルコ共和国は同時に、「一民族一言語」の論理を顛倒させ語族の違うクルド族を「方言」とする統制国家／警察国家だった。冷戦下トルコでの言語学者のフィールドワークの記録はふんわりした「親日国」イメージを強く描きあがる。第一次大戦終結百年の年に読み直したい一書。

(二三二頁 税込七九九円)

高木仁三郎セレクション

佐高信、中里英章編著
岩波現代文庫

福島原発公害時代を生きる我々にとって、原発批判を繰り広げた市民科学者の高木仁三郎が遺した著作群は必読である。高木のエッセンスが凝縮された本書は、最初に読む一冊として薦められる。原発の多岐にわたる諸論点についての根底的かつ全面的な批判を読むと同時に学ぶべきは、社会に深く根ざしながら、それと格闘した市民科学者としての生き方である。(四〇〇頁 税込一四六九円)

(投稿・とうこ／靈人)

カオスとフラクタル

山口昌哉著

ちくま学芸文庫

カオスもフラクタルも人口に膾炙した概念であるが、その詳細については知らない人も多いのではないだろうか。本書はこれらの數学的な内容について、その研究史も交えて平易に解説した入門書である。読めばきっと世界観が変わることまちがいない。また、本学の理系学生ならばどこかで見覚えのあるような名前が多数登場するのも見どころだ。

(一一三頁 税込一〇八〇円)

マンガ・ギリシア神話

△1▽△8▽

里中満智子著 中公文庫

聖書、偉人伝、古典文学……岩波文庫に入っているような教養作品を、里中満智子氏は漫画によって表現してきた。全八巻の本シリーズもその一つだが、単に分かりやすいというだけではない。□承ゆえ体系化が難しいギリシア神話を、客観的かつ網羅的に収録し、コラムによって適宜解説を加えている。岩波文庫に埃を被せる前に、この漫画を手垢まみれにしてみては。(二三四頁 税込冬至六三七円)

(蕨餅／いの)

クアトロ・ラガツツイ(上・下)

天正少年使節と世界帝国

若桑みどり著 集英社文庫

まだグローバリズムという言葉が馴染まぬ時代、日本の「天正少年使節」の四少年(クアトロ・ラガツツイ)はヨーロッパへ出かけた彼らが待っていたのは、キリスト教迫害の時代であった。四人の少年を通してダイナミックな歴史的変遷を描いた本書は、世界に開閉する日本の差異を示してくれる。

(五七五頁 税込一〇一五円)

いつも「時間がない」あなたに

ヤングайл・ラライオナ・エヴァン・シャーフィール著

大田直子訳 ハヤカワ文庫NF

忙しそぎて自分の好きなことができないという悩みはよくある。本書では、こうした事態が生じる理由とその対処法を知ることができ。矢乏は欠乏を生む。したがって、一度忙しくなれば、そこから脱出することは困難なのだ。そして、この構図は貧困においても生きる。矢乏は欠乏を生む。したがって、一度

ダンゴムシを未知の状況に置くと、予想外の行動を選択し始めた。ダンゴムシは「心」を持つのではないか。

科学では、「心」を脳の働きとして考えてきた。しかし実験を通して見てきたのは、大脑を持たないダンゴムシにも、「隠れた活動部位」としての「心」があるということだった。「心」の捉え直しを図る、刺激的な研究譚。

子ども時代を引きずる人々
岡田尊司著 光文社新書

親から離れる人にとっては、その存在の意味をより強く感じる時期に違いない。本書は、著名人についての議論から始まり、子ども時代に他者と安定した関係を結べなかつたことによる「愛着障害」と呼ばれる対人交流の傾向をもつ人々を検討する。心の病への学びは、他者のためのみならず、自分を顧みるきっかけになるだろう。その端緒として、本書をおすすめする。(二二三頁 税込九二九円)

ダンゴムシに心はあるのか

森山徹著

PHP研究所

(三七五頁 税込一〇三六円)
(きもの／蕨餅)

(トロ／投稿・のし梅)

大衆の反逆

オルテガ・イ・ガセット著
神吉敬三訳 ちくま学芸文庫

「エリート」と「大衆」という二種類の人間に分けた時、私たちは果たしてどちらに属するだろうか？ 京大に入つて、将来は学者や官僚や一流企業の社員になる……実際、「エリート」を自負する人が大半ではなかろうか。本書は一口に、大衆批判の書と要約できよう。ただ、そこで批判されているのは「エリート」の顔をした大量の「大衆」たちである。そう、私たちなのだ。（三〇二頁 税込九五〇円）

米朝ばなし

桂米朝著
講談社文庫

落語に触れて、面白きこともなき世を面白く生きたいものだ。本書では、上方落語を復活させた名人が百余りの関西の地を挙げ、そこにまつわる歴史を軽妙洒脱に紹介してくれる。北新地、道頓堀、祇園、三条・四条、伏見……。連続たる芸能と人情の風土に、私たちがいること、豊かな安心を覚える。付随する昭和五〇年代の街の写真と司馬遼太郎の解説も好い。（四八九頁 税込八四三円）

（いの／春海）

遙かなるケンブリッジ —数学者のイギリス

藤原正彦著 新潮文庫

『國家の品格』で著名な数学者・藤原正彦氏が、ケンブリッジでの一年間を綴った物語風エッセイ。家族、隣人、研究仲間や学生との日々は、結構辛く、醜く、そして美しい。グローバルな SOMETHING に思いを馳せていたあの頃、国とは何か、異文化とは何なのか、この人間臭い物語が教えてくれた。未来に留学する方へ。こんな日々があなたにも訪れますように。（二七三頁 税込五六〇円）

今夜、すべてのバーで

中島らむ著
講談社文庫

酒は旨い！ そして、酒は怖い！ 未成年であろうと関係ない。周りの学生は、キミを悪性の泥酔状態にしようとして、常に目を光らせている。そんな酒の魅力と恐怖を描き出した小説として、本書以上のものはなかなかない。アル中にもだるる男の哀愁と辛苦をこの書で味わつたのち、もし無事に成人することができたら、男を泥沼に沈めた酒の呪を、上手に味わってほしい。（三二二頁 税込六〇五円）

（いの／トロ）

戦後史入門

成田龍一著 河出文庫

歴史ならぬ歴史はあるのか。例えば、高度経済成長期。この頃の日本は景気も上昇していくいい時代だったなどきれている。しかし、その反面にこの時代の流れに乗ることができなかつた無数の人たちがいた事実がある。歴史はそのように取捨選択されるが、そのなかで捨てられた歴史は歴史ではないのか。それをどうやつたら歴史にできるのかを考える一冊。（二四〇頁 税込七三四円）

アルジャーノンに花束を〔新訳〕
小尾英佐訳 ダニエル・キイス著
ハヤカワ文庫 NV

I Q 6 8 の白痴から I Q 1 8 5 の天才へ。みんなみたいにかしこくなればもっとなかなかれる……はずだった。手術で「知性」を獲得した三三歳の知的障害者・チャーリー。彼が予期せぬ「愛情」の喪失に苦悩する日々を一人称語りで綴る。「アルジャーノンに花束を」……物語の最後に明かされる、題名のメッセージ。「知性」の旅を始めるあなたに、の言葉を贈りたい。（四六四頁 税込九一五円）

（ういろう／いの）

新刊コーナー

生き抜くための恋愛相談

桃山商事著

イースト・プレス



「片思い中の彼をLINEで誘つても、返事が来ない……」。もしこんな相談をされたらあなたはどう答えるだろうか。別の相手を探すよう勧めるだろうか、それとも催促の文

章と一緒に考えるだろうか。著者の桃山商事は、相談の事実関係を整理したうえで、次のような回答を示す。いわく、「返ってくる球は、投げた球の速度に比例する」。

第二の性 はるかなるエロ口は

森崎和江著 河出書房新社

一九六五年に日本

本のフェミニズムにさきがけて出版され、ボーガワ

ールの「第二の性」

を想起させるタイトルをもつ本書は、たんなる男女間の権力の問題をあつかった書ではない。これは異性、ひいては他者との関係

になる質問まで——さまざまだ。しかし、どの質問にも通底している態度がある。それは、相手の話をもとに回答を展開

するという（一見当たり前だが実はなかなか難しい）態度だ。切れ味の鋭い回答は身に染みるぶん、相談者からしたら重要なところまでバサバサ切り捨ててしまうものの。代わりに彼らが行つのは、こんがらがった悩みを解きほぐし、主体的に決断して動くための手がかりを与えることだ。著者の一人は、「自分だったらこんな風に聞いてもらいたいな」と思う姿勢で恋愛相談に臨むという。女性のみの恋愛相談を集めているが、性別を問わず読んでもいい一冊だ。きっと、身の回りのモヤモヤを整理するための言葉を手に入れられるだろう。

（投稿・のし梅）

（二二三頁 税込一五二二円 9月刊）

一〇〇人以上の恋バナに耳を傾けてきたというだけあって、本書の相談内容も——これって脈あり？——といった定番ネタから、男が思つ「エロい女」ってどういふ人？——といつても、さまでさまである。しかし、どの質問にも通底している態度がある。それは、相手の話をもとに回答を展開する

するという（一見当たり前だが実はなかなか難しい）態度だ。切れ味の鋭い回答は身に染みるぶん、相談者からしたら重要なところまでバサバサ切り捨ててしまうものの。代わりに彼らが行つのは、こんがらがった悩みを解きほぐし、主体的に決断して動くための手がかりを与えることだ。著者の一人は、「自分だ

をいかに構築していくかについて、身を削るようにして考えぬかれた闘いの書である。本書は、沙枝と律子という二人の女性の交換日記の体裁をとっている。沙枝は結婚して子どもが二人いるが、いまは別の男性と同居している。律子は体が弱く、結婚せず子のなことを女としてひけ目に感じている。二人は性にまつわる体験を吐露しあい、異性との本源的な関係を追求する。彼女たちが性愛に見いだすのは、単独の存在であった自己の基盤が他者である異性に揺さぶられる不安である。そして、分断された他者として本書で描き出されるのは異性にとどまらない。産まない女である律子は産む女である沙枝にたいして劣等感や疎外感を抱いている。しかし、それでも互いのあいだに関係を結ぶことをあきらめず、彼女たちは交換日記で言葉を交わしあう。このような自他の分断を前提として、愛とは「生きるための必要条件として他者の存在をよぶ声」だと語られるのだ。

さみしいから——本書を著した動機を、あとかきで森崎はこう語る。時をへて本書が復刊された現代においても、彼女が苦しみつづねいだ言葉は、おなじ「さみしさ」を抱えた人の心に他者との関係を築く勇気をあたえてくれることであろう。（投稿・ミセ）

（二二六頁 税込一五九二円 12月刊）

多田富雄からだの声をきく

多田富雄著

平凡社STANDARD BOOKS



星を見るのが好き
で、おたまじやくし
の誕生をじっと觀察
し、蛹から羽化する
アゲハチョウの醸さ
と美しさに胸を高ぶらせていた少年は、死ぬ
まで生命の神祕を追い続けた。
多田富雄は、免疫応答を調整する抑制T細胞の提唱などの先駆的研究で知られる。本書は、免疫を切り口に生命倫理や文明社会を優しくて柔軟な筆致で考えたエッセイ集。門外漢の評者でも興味深く読めた。

免疫とは「自己」を「非自己」から守る仕組みだ。とはいっても、両者は画然と区別されるものではない。例えば、免疫反応を司る「自己」のT細胞にも、「非自己」の特性を持つものが若干含まれており、刺激を与える場合を重ねながら、しかし全体としての「自己」は維持されるという。一方、細胞の自己死が示すように生と死も互いに包み込まれている。多田が倫理を語るのは、細胞レベルでの利他的な死を安易に人間の選別と連結させな

いためだ。

心酔した能の豊饒な時空間や、アフリカ・東南アジアの旅を通して、歴史の中の自己に思いを致し人類の未来を憂えてもいる。芸術と科学と旅の自由つながりが羨ましい。

晩年は脳梗塞に襲われ、半身不随と臓下・言語障害に苦しんだ。「絶望して死のうと思つた」。だが、リハビリに励み、左手だけでキーボードを叩き続けた。やがて思えるようになつた。「もとの私は回復不能だが、新しい生命が体のあちこちで生まれつつあるのを見私は楽しんでいる」。生死のせめぎあいを見つめ尽くした尊い姿だ。頭が下がる。(春海)

(二二四頁 税込一五一円 12月刊)

ハックルベリー・フィンの冒険 上・下

マーク・トウェイン著
千葉茂樹訳 岩波少年文庫



「すべて近代アメリカ文学は一冊の本からはじまつた。それはマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』であり、アメリカ的作品の源流である」
かつてアーネスト・ヘミングウェイはこう

述べた後、「この作品以前に、アメリカ文学は存在しなかった。この作品以後に、これに匹敵する作品は存在しない」とまで絶賛した。『トムソーザの冒険』の続編でもあり、今も尚、世界中に愛され続ける本書を読者はご存じだろうか。

舞台は南北戦争以前のアメリカ南部。前作で巨万の富を手に入れたトムの親友ハックは、アルコール中毒の父親から逃げ出すためにミシシッピ川を漂泊する旅へと出かける。道中、脱走奴隸のジムと合流したハックは、牧歌的な夜暮らしの中で、殺人・詐欺・偽善という様々な人間の側面を目にする。その出会いの中でジムとの友情が深まっていく。

南北戦争以前のアメリカにおいて、脱走奴隸の援助は法的な罪であるだけでなく、道徳的な悪でもあった。幼い頃から口が達者で悪知根がきくハックでさえも、自分自身が奴隸の手助けをすることに罪悪感を抱かずにはいられなかつた。友情と不徳に揺られながら、ハックの筏は川下へと流れしていく。

村の悪魔鬼と黒人奴隸がミシシッピ川を流浪する本書には、アメリカの田舎臭さが漂つてゐる。それは正しくも生きられず、善くも生きられない人間が、それでも自分らしく生きようとする奔放な香りである。(きもの)

(二三五頁 税込各七六〇円 1月刊)

舞台の上のジャポニズム —演じられた幻想の「日本女性」

馬渕明子著 ハヤカワ出版

一九世紀後半、
日本の開国と共に
海外へ伝わった日
本文化は、ロンド
ン・パリで開催さ
れた万国博覧会を通してヨーロッパ、特にフ
ランスにおいてジャポニズムと呼ばれるアーテ
ィストを引き起こした。北斎や広重の浮世絵、漆
塗りや蒔絵などの精巧なる工芸品、これらの
美術によって日本という異國の地は、少しずつ
増えしていく日本紹介の書物や旅行記の記述
と相俟って、一種の幻想を伴いながらフラン
ス人の前に登場したのである。マネやゴ
ッホなど当時における新進気鋭の画家たちが
浮世絵を探り入れたという話は有名だが、ジ
ャポニズムは一般大衆をも魅了するムーヴメ
ントであったことが窺える。そしてその幻想
が視覚的な形で具現化されたのが演劇であっ
た。

当時の新聞や雑誌に掲載された挿絵・評判
などをふんだんに盛り込みながら、本書では
一九世紀末にかけて話題となつた日本をテー
マとしている。



マチューの劇作品の内容、そしてそこに示されたフランス人による日本觀、中でも日本女性に対する意識を検証していく。我々の目から見るシン・ワズリ=中国風味の混ざり込んだ装飾を凝らして舞台を作り上げたフランス人は、彼らのイメージにもとづいて演劇を作り上演した。しかし、彼らの演劇に見られる日本觀というのはそれこそ「幻想」であって、彼ら自身の価値観を反映したステレオタイプにすぎなかったこともまた事実である。ここには他文化理解への難しさも垣間見えているといえただろう。

(一九〇頁 税込一七一八円 9月刊) (ねこ)

憲法パトリオティズム ヤン・リ・ヴェルナー・ミュラー著 斎藤一久・田畠真一・小池洋平監訳 法政大学出版局



近年、社会における分断を背景に、分断社会をいかに統合するか議論が重ねられている。
政治理論では、市民宗教(civil religion)やリベラル・ナショナリズム、憲法パトリオティズムなどが、社会統合を目指すする理論と

して存在する。本書は、「ボピュリズムとは何か」を著し、メディアでも発言を重ねる気鋭の学者ヴェルナー・ミュラーによると、憲法パトリオティズムについての概説書である。憲法パトリオティズムは、ハーバーマスによって主唱・洗練された理論であり、開かれた公共圏での議論を通して、再帰的に問い合わせ続ける合理化されたアイデンティティの形成を目指す理論である。そして「憲法パトリオティズムは民主的な政治的ルールを考え、正当化し、そして維持する」という難問への応答の一部である」という。「憲法」の語が入っているが、特定の憲法典への愛着を称揚する議論ではなく、自由、平等など憲法に含まれる普遍的原理と公正かつ民主的な手続きへの愛着を社会統合の原理とする理論である。憲法パトリオティズムについては、すでに斎藤純一や毛利透などが、日本に紹介している。しかし、本書は、その来歴(第一章)、理論(第二章)、ヨーロッパにおける展望(第三章)について、様々な批判を紹介しつつ、多角的に論じた本格的な概説書である。それ故、憲法パトリオティズムのみならず、社会統合や政治理論、現代社会の在り方などを論じる際に、本書は必ず参照すべき一冊であると思われる。

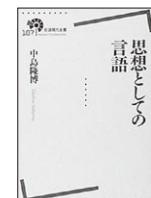
(二四二頁 税込一九一六円 9月刊) (投稿・行人)

思想としての言語

中島隆博著

岩波書店

「思想」と「哲学」
といふ言葉はほとん
ど区別されずに用い
られることがある。



しかしもし「哲学」
から区別される「思想」の特徴があるとすれ
ば、私見では、「思想」は何かの形で「人
間の生」について扱うものであるということ、
そして論理だけでは語りつかせないものを
含むということ、この二点にあると思う。

本書の底流をなしているのは、「言語」は
特殊性の中にありながらも普遍へと向かおう
とする人間の営みの一環であるという考え方
である。確かに言語において、ある言語のあ
る言葉（例えば冒頭に挙げた「思想」という
言葉もその一つである）の解釈一つですら、人々
の間に無条件で普遍的な一致を前提すること
が困難であることは容易に想像できる。それ
が異なる言語の間となればなおさら困難であ
り、さらに「純粹言語」に至れば「翻訳」は
実際的にはほとんど不可能といってよい。け
れども人間はそれを求めようとする。言語の
営み」と差し当たり言うことができるだろう。

模範像なしに
テオドール・W・アドルノ著
竹峰義和訳 みすず書房



「思想」は我々があだん用いている「言語」
そのものにも限るものである。もじこ「思
想」に興味を持たれたならばぜひ実際に本書
を紐解いてみてほしい。
(投稿・らしく)
(一七二頁 税込一四八四円 9月刊)

持つ特殊性を脱して、普遍的なものへ、ある
いは救済へと至ろうとする。これは西洋ある
いは近代に限らずとも、東洋あるいは古今和
歌集の頃から、人々の関心を引くテーマであ
った。本書では、この普遍へと至ろうとする
思想としての言語をめぐって、空海や夏目漱
石、ベンヤミン、井筒俊彦といった人々の思
想が布署されている。

思想は我々があだん用いている「言語」
そのものにも限るものである。もじこ「思
想」に興味を持たれたならばぜひ実際に本書
を紐解いてみてほしい。
(投稿・らしく)
(一七二頁 税込一四八四円 9月刊)

だがここでもう一步進んで、以下のように問
いたい。そうした美的世界は、日々我々が生
を営む場である現実世界に対していかなる影
響と意義を持つのか。それは果たして現実世
界で生きる上で必要なのか――

本書は、たちまち答えた窮屈な根本的な
問い合わせに対し、晩年のアドルノが肯定的回答
を何とか紡ぎ出そうとした絶望的試みの記録
である。本書には一九六〇年代に彼が残した
小論と講演が一六篇収められているが、その
テーマは音楽、映画、建築など多岐に渡る。
その彼による多角的な現代芸術の分析は、そ
の大半が悲観的な色合いを帯びている。芸
術を含む文化全体が产业化してモノ化した結
果、精神的内実を奪われてしまった現今芸
術には、普遍的で高尚な理想的・美的世界を
描くことは不可能である――このアドルノの
判断は決定的であり、本書を貫いている。

だがそれでもアドルノはそうした現今の芸
術の不可能性を分析することのうちにのみ、
芸術の再生の可能性がまだ見ぬ形で眠ってい
るとして、一縷の望みを繋ごうとする。それ
を支えるのは、私たちが冒頭に挙げた問いに
対するアドルノの握るがむ肯定的信念に他な
らない。五〇年後の我々にその彼の信念を引
き継ぐことはできぬだろうか。
(二二二頁 税込四八〇円 12月刊)

小説からみた「中学生」

私事で申し訳ないけれど、中学生をキャラクターとした物語が好きだ。ほんと子供でもありますから、大人より偏ってソリッドな自我をもつ彼らは、国産の小説のなかで幾度もその持ち味を發揮してきた。好みが多分に発揮されていると思うけれど、今回は彼らが物語の中でどうあるまっているか、僕の考えを聞いてもらいたい。

湊かなえ著『告白』は、娘を自分の生徒に殺された教師の復讐を描くサスペンスだ。巻頭末尾における教師のむき出しの憎悪は苛烈で、広く好評されるとおり物語として面白く読める。ただ今回の趣旨に合わせると、これもまた中学生小説だ。殺人者である男子学生二人がもつ歪な関係と、それぞの母への依存の形が物語の中で鮮やかに表現され、物語の根幹をかたちづくっている。ここで描かれている母—息子や男—男の関係自体は特に少年に生じる必然性を持っている（大人の男）でもしらば変わらない）ものだけれど、未完成の人間のフィルタを通して「不気味さ」を持ち、それが教師の異常にクールともいえる憎悪との好対照になっている。

いじめは、中学生の抱える理不尽の反映としてとくに想起されやすいかもしれない。『告白』ではキャラクターの背景に塗りつぶされてしまふ感のあるそれを活かしきったのが川上未映子著『ヘヴン』だろう。互いにいじめられる少年として出会った一歳の『僕』とコジマを通して、善と惡、そして正しさという命題を悲劇的に描く。それらの命題を抱えそのままよろ存在として、一歳はまさに適切である。自分をとりまく家庭、身体、学校で主に形成されるコミュニケーションからの逃走の不可能さ、それが初めて理

解され始めるのはまさにこの年齢だ。逃げられないものの、逃げても追いかけてくるもののへのぶるまい方を自己決定する。そして『ヘヴン』で『僕』が失ったもののように、初めて選択のために本当に大切な何物かを放棄する。それも、この時期の少年のもつ特性の一つだらう。

『ヘヴン』と同じように、彼らを一人称から捉えた小説の一つが桜庭一樹著『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』だ。鳥取の港町のなぎさと、東京からやってきた海野藻屑という少女たちの悲劇的な交流を描く。実弾（大人！）になることを急ぐなぎさは、親からの虐待を受ける藻屑のもの、少女のみが持ちうる不安定な美しさを絶望的に追慕するヒロインとなる。彼らは、自分たちのみしか持ちえない未成熟な危険をはらむのと同時に、大人になるために失われなくてはならない美しさをも兼ね備えている。それを一人称で少女に直視させた作品として、この小説も特別なものだらう。

『ヘヴン』内でコジマはいじめ加害者の少年を指して「何もわかつてない」と言う。これは、いじめ被害者から加害者への言及であるとともに、大人からの時期の少年に対する言及でもある。僕たちは彼らは何を考えているか、何をするかわからない存在だと感じられる。だからこそ現実では、少年犯罪が社会に影を投げかける。一方で、それが彼らの常に持っている力でもある。健健全輝きにあふれた青春物語が愛されるのと同じように、自分たちの未成熟な自己と身体を縛り、傷つけていくものごとに取り囲まれ、戦いを強いられて流す血には、奇妙な美しさが宿る。それが、中学生という存在が織りなす物語たちの魅力の一つなのだ。

（トロ）



私の本棚

「ミニユカ」に矮小化されない豊饒さ

たじょえはサークルあるいは研究室で、あなた（女性）は先輩（男性）に「だめだよ。福抱^{ふくい}着て鍋からそのままラーメン啜るなんてそんな女子力ないことやつたら」とからかわれる。不快で堪らない、なのに「え、何言ってんですかあそんなどしませんよ」とへらつと笑って応じてしまう。そして「なんでもやめてって言えないんだろう」と自己嫌悪に陥る。そうやってあるまつてしまふから、先輩も私をからかってOKと見なすんだろうな。やめたい、でもそうするまつちやう。どうしよう。そして、どうやってやめてもらおう？爆発したら「キレのこないやん」と白い目で見られるだろうし、「幼稚な先輩」と内心軽蔑する、ひとで耐えるのちがう。さらりと「先輩、みんな言つてますよお「下品な冗談で絡んでうっさい」って」と皮肉ののも……。さて、このようなケース、どうしようか？

アサーティブという姿勢

自分の気持ちに誠実に、それを率直に相手に伝える。相手の目を見て、真摯に「女子力ないとか、からかわれるのは嫌です。止めてください」と、落ち着いた声で語尾まで言い切る。ちなみに言われたその場ではなく、場を改めて——。フェルプス、オースティン著「アサーティブ・ウーマン」（誠信書房）は、「非主張的」「攻撃的」「間接的に攻撃的」という行動パターンをそれぞれドリス、アガサ、アイリスという女性に見象し、彼女たちとエイプリルを対比させ、アサーティブなるまい——「私はOKだし、あなたもまたOK！」——を描き出す。著者はこのふるまいの方のみが「自尊心を高めるただひとつ的方法」と断言し、そのための練習問題と行動目標を示す。したがって本書は実践への手引きとなるが、アサーションには、新たに自己に出会えることだろう。

（投稿・破鍋）

ンはもとが行動療法の一環であるため、実践を重視するのは当然のかもしれない。実際本書と肩を並べるアサーションテキストたるアルベルティ、エモンズ著『自己主張トレーニング 改訂新版』（東京図書）も、長期・中期・短期の目標を立て、達成のための実践とその結果を逐一「成長記録」ノートにつけていくよう勧めている。すると、前者における「自尊心」、後者におけるロジヤーズの思想の受容、そしてディクソン著『第四の生き方』（つげ書房新社）、「それでも話し始めよう」（クレイイン）における「自己信頼」「内側の力」といった語りがいかにしてなされるようになったのかといふ、心理療法史上興味深いテーマが広がっていることに気づくだろう。それに対して平木典子著『アサーション入門』（講談社現代新書）は具体例や練習問題が少なく、理論的だ。アサーションを妨げるような考え方や社会的背景、アサーションの対人関係上の機能等々について、平易な筆致で丁寧に、かつ簡潔に記述している。概要をまとめりたいなら、ちょうどよいかもしれない。

自分が変われば相手も変わる

ところで冒頭のケース、アサーティブにふるまいとして、かの先輩は「ごめん」とやめてくれるだろうか？ 実を言うと分からぬ。なぜなら、これまでの関係は、自分のふるまいに対する相手の応答によって作られてきたのであり、アサーティブになる、すなわちふるまいを変えることは、相手からの抵抗を招くことがあるからだ。怒りを例にしてそれを説明し、心構えを説くのがレーナー著『怒りのダンス』（誠信書房）だ。変化の過程はつるい。しかし乗り越えていくには、新たな自己に出会えることだろう。

編集後記

3月。今年も卒業の季節がやって来ましたね。かく言う私も大学院、及び本誌の編集委員を卒業する運びとなりました。思えば1年前、教養主義のかたまりのような綴葉誌にあって、新人の私が初めて選書したのが『ハリー・ポッターと呪いの子』でした。私にとって「ハリポタ」は幼い頃からの愛読書で、特に第六巻でダンブルドアが語った言葉は、ずっと私の心に刻まれています。「暗闇の中においても幸せは見つけることができる。光を灯すことを忘れないければ」。

さて、今月号の話題欄では、最後の書評としてディケンズを選びました。そちらをお読み頂ければ、私の読解が多分に上の言葉の感性に従っていることが分かるでしょう。それが絶対に正解だとは言いません。ただ、幼い頃に読んだ本が、大学院を卒業する今とっても自分の感性に影響している……まさにダンブルドアの言う通り、「言葉とは尽きることのない魔法の源」なのだと思います。

最後に、この1年間多くの方から読者カードを頂きました。皆さんの言葉こそ、私が書評をする上で一番大切な魔法でした。今後とも綴葉をよろしくお願い致します。（いの）

——
基本的に『綴葉』はそんな感じのテーマの特集が少なんですね。我々もそのことは感じていて、特集を決めるときなどにランペやマンガをやりたいと言つていていつか実現したいです。乞うご期待ください。
○綴葉を読みつつ気になる本はちよちよコメントをとって「読みたいリスト」を作り出してから大変有意義な広い視野の読書ができるようにならせてきました。（防災研 菊川）
——『綴葉』がそのように貢献できているなら幸いです。私も『綴葉』の書評をする際に、あまり知らないジャンルの本に挑戦してみたいと思うのですがなかなか……。でも、広い視野を提供できるように努力していくまでお願いします。（ういろ）

当てよう！図書カード

最近の散歩コースは南禅寺。まるで古代ローマのような水路閣には、どこから水が流れてくるのだろうと歩いていると観光名所インクラインにでました。ではここで問題、このインクラインの線路を下った終点にある建物といえばなんでしょうか。

1. 並河靖之七宝記念館
 2. 靈山歴史館
 3. 河井寛次郎記念館
 4. 琵琶湖疎水記念館
- (きもの)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（またはe-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは4月15日です。

11月号の解答

11月号の「今月に京都競馬場で開かれるビッグレースはどれでしょうか？」の解答は、2. エリザベス女王杯でした。今回の勝利馬はモズカッチャン号でしたね。応募者22名中22名の方が正解でした。図書カードの当選者は、なすさん、ねこねこ55さん、野神さん、キタサンブラックさん、エリザベスさん（順不同）です。おめでとうございます。（ニコ）

——『綴葉』の宣伝活動（笑）にご協力いただき誠にありがとうございます！ 読者が増えることが我々編集委員の無上の喜びです。これからもよろしくお願いします。
○ライトノベル特集を読んでみたいのです。
——『綴葉』はそんな感じのテーマの特集が少なんですね。我々もそのことは感じていて、特集を決めるときなどにランペやマンガをやりたいと言つていていつか実現したいです。乞うご期待ください。

（T.S.O.S.O）

読者からひとこと